

	<h1>W.A. Mozart Hiroba</h1> <p>「モーツァルト広場」 SINCE 1995</p> <h2>第27号</h2>
---	--



「あざみの歌」に送られて

モーツァルトへの手紙 (その3)

会員番号 K.618 加藤 明

あの未曾有の大震災のあと、貴兄の紡ぎ出す音色が一層繊細でやさしく語りかけられるように感じました。

内省化というか、これまでの「自己」を振り返る作業を一斉に強いることになった大震災であり、これからをどのように考え行動したらよいのか、という現実の「自己」を突きつけることになった衝撃的な巨大地震でもありました。

そんななかで私にとって貴兄の音楽は己れの過去の掘削や思い起す作業のみならず、これからを模索する運動にあっても大いなる味方になってくれたのでした。

とりわけ、ザルツブルク時代に多く書かれた教会音楽（ミサ・リタニア、ヴェスペレ、レジナチェリなど）は貴兄の精神の土台のような重厚さをもって迫ってきては私を奮い立たせてくれたものです。

それらは何かにすがりたい気分、形而上学的な思考の行き詰まりといった内面の葛藤に風穴を開けてくれる通気性を孕んだ音楽として、あらためて私に気づきを与えてくれたようでした。

貴兄の音楽はやはり比類なき恵みなんだ、という気づきを。

そんな大震災の影響冷め遣らぬ8月のお盆過ぎに、母が91歳の往生をとげました。

モーツァルトよ、はじめて母の話をして。

母は大正9年生まれでしたので、あの語り継がれる関東大震災が勃発したときはまだわずか3歳でもちろん直接の記憶はありませんでした。

そして、彼女の昇天の年となったこの3月11日の大震災が日本を襲ったときには殆ど寝たきりでしたから、これまた覚束ない状態でした。

つまり、母は関東大震災と東日本大震災この二つの未曾有の災禍のあいだをあたかも実人生のプロローグとエピローグのようにほぼ90年間跨いで生きたこととなります。

晩年は本人はもとより周囲の家族の者にとってもその際限ない老いの変化は初めての体験であり、ほんとうに予測不能の驚異の連続でした。

そんな中でのいくばくかの救いは、母の老い方が童心に還るがごとく可愛らしいかたちで進行していく一面がみられたことでした。

そこには過酷な満州からの引き揚げや若くして伴侶を喪った突然の不幸とその苦労をのり越えた強き大正女の片鱗はまったく観られませんでした。

このような認知症を患いながらも可愛らしく老いを全うできたのは兄嫁の献身的な介護があったればこそでした。

人はその老いを充足するためにはどうしても真摯で強靱な助けが必要なのですね。

私は母の死に顔を見たときに、あまりに自然

な苦しみ一つないその表情に感嘆してしまいました。

慣れ親しんだ自分の家で家族に見守られて逝く、という今日の至難な現実を思いながら、母が幸福な一生を完結させた、という僥倖を噛みしめたものでした。

貴兄のことばに「死は真の目標」というフレーズがありますが、正に母は精一杯己れの命を生きて、見事に全うしたと言えるでしょう。

もの心ついてからの母の人生にあって、誤算は大きく二つあったように思います。

一つはやはり「敗戦」という苦渋を極限的に舐めさせられたこと。

もう一つは共に故郷を離れ、満州での夢を求めて結ばれ、偕老同穴の契りを交わした夫に志し半ばで若くして先立たれたこと。

前者は引き揚げから夫の独立まで家族的な結束力でなんとか乗り越えられたようであるが、後者はシナリオにはない突然の悲劇であり、その苦難は三男の私の想像を絶するものがあります。

夫を見送ったあと彼女は看護婦として一家を支えるのですが、振り返って私は母からついぞ一度も後悔の弁や愚痴を聞いたことがありませんでした。

いや、どんな逆境にあっても果敢に立ち向かい、笑顔を忘れない気丈な女性でした。

そうできたのはきっと貧困慣れしていた少女時代を思い起こし、多くの他人のお世話で「いま」を豊かに生きている感謝の念が強かったからだと思います。

貴兄のお母さんマリア・アンナにも重なる朗らかさを信条とする母は、歌も嫌いではなかったと思いますが、どちらかというと言痴の部類でした（私は彼女のそんな負の遺伝子を組み込まれて生まれ育ったようです）。

その点は父とは真逆であり、母が積極的に歌わなかった理由は父があまりに上手に民謡などを唄うのを聴いて己れに失望したからではないか、とすら思えるほどです。

そんな母ですが、生前子供たちがよく聞かされていた母の好きな歌に「あざみの歌」があり

ました。

葬式が終わった夜のことで。

家族で母の思い出話に花を咲かせていたところ、姉がとっさに母の数少ない持ち歌であるこの「あざみの歌」（私の生まれた昭和24年作曲でした）を涙目で口ずさみはじめたのです。

「山には山の憂いあり・・・#・・・海には海の・・・b・・・」。

そしたら驚くことにそばにいた数人の家の者が「ましてやこころの花園に・・・#・・・」と姉にひきつられたように唄いはじめたのです。

慌てて私も後を追うように合唱の輪に入りましたが、歌詞が殆どわからず、どうにか輪唱風についていくだけでした。

ああ、音楽の恐ろしいほどの魔力です。

一瞬、だれの脳裡にもかつてのにこやかな母の映像がくっきりと描かれ、《死んでる最中》の母を呼び起こし、その母と共に大きな声で唄っていたのでした。

ふと祭壇を見上げたら、曇ったメガネの先で母がニコニコしながらこっちを眺めており、だれもが眼には涙を溜め、顔をくしゃくしゃにし



ながらの大合唱になっていたのです。

「いとしき花よ・・汝はあざみ・・、こころ
の花よ・・汝はあざみ・・、さだめの径は

涯てなくも・・かおれよせめてわが胸に・・」

いったい送っているのは我々なのか、それと
も母なのか。

残された家族みんながこんなにも自然に弔い
と哀切の情を露呈し、共鳴するとは・・。

これは母のために、そして残された家族のた

めに音楽という魔力がこしらえてくれた至福の
ときそのものだったと思います。

長くなりましたがお仕舞いに、私から葬儀当
日出席された皆さんに朗読させていただいた母
を送ることをばを記述して閉じたいと思います。

モーツァルトよ、貴兄のクラリネット協奏曲
のアダージョ（第2楽章）、あの永久なる白鳥
の歌を背景に母を偲ばせていただいた次第です。

レクイエム断章

2011.8.24

母ヒサの告別の日に

※レクイエムとはラテン語で「安息」

大正生まれの意地をみせた我が母ヒサさんがいまどきは珍しいほどの
最期まで嫁の意地をみせたKさんに看取られてとうとう逝きました
大往生とはいうけれどヒサさんの一世一代の大往生をプロデュースしたのは
我が異端の長兄Tさんをその不条理な昇天まで支えつづけたKさんその人でした
それはむごいほどの嫁としての意地の体現にほかなりませんでした

栃木県中央部の片田舎佐目町の小作農家に八人兄弟の末っ子として生まれたヒサさん
あなたはいち早く自立することが頼みという宿命を小さな懐にいれあなたらしくボランティア精
神が求められる看護婦という職を得て神奈川から満州に渡り夫となる我が父孝三さんと出会いま
した

「あなたが医師にならないなら結婚はしません
でも、成ろうと努力するならとことん添い遂げます」という
脅迫まがいの凛冽な宣誓は夫孝三さんをどんなに勇気づけたことでしょう
あなたの三男はこの言葉に込められた意味を
「わたしはもう戻る場所がありません。故郷を棄て前に行くしかないのです」
という切実な叫びと解しておりました

末っ子特有の強烈なノスタルジーすら黙殺しなければならなかった瀬戸際で
極寒の満州が強いた燃えこがすような愛の炎がヒサさんの体内を巡った瞬間でした
驚くことにあなたはその熱い思いをその後己れの死を全うするまで貫いたので
あなたが本領を発揮したのはそんな脅迫まがいの宣誓をした夫孝三さんが
43年前あっけなくあの世に逝ってからはなかったでしょうか
ほんとは誰一人その苦渋と悔恨を知るものなどおりません
それほど深い海溝のような暗闇をあなたは手探りで独り黙々と歩きはじめました
周りの家族はただただその後姿についていくしかありませんでした
そのころあなたの愚息三男は己れのことで頭がいっぱいで
あなたの思いに寄り添うことなどできなかったという取り返し不能の悔いが残ります
結局はあなたの母乳の記憶で生きて行くしかなかった三男ですが
母乳の記憶は人を無垢にさせ素直な感性を育てるものなのかもしれません

この世の仕組みやルールをそれはそれはあるがまま素直に学びはじめた三男は
いつしか姉さん女房と家をつくり二人の子をもうけ
おかげさまでいまや孫に「ジータン！」と呼ばれるように歳を重ねてきました
これも言ってみればあなたのふくよかな母乳の記憶に端を発している所業なのです
三男の思春期に「女はね、弱いものなの。だから男か守らなければ・」と諭したヒサさん
しかし、それは真っ赤な嘘だったことをその後のあなたの行動が証明しておりました
ヒサさんのだれにも真似のできない才能の一つに他人を迎え入れる笑顔がありました
ああ、あなたが放つ笑顔のオーラはなんと素敵だったことでしょう
それは「善く生きるための笑顔」といえるものでした
家族愛の象徴としてもヒサさんの笑顔は出色でしたが、多くの苦渋を呑み込んだ者だけが持ちうる
鍛え上げられ磨きぬかれた笑顔だったと思います
あなたの三男にしてもあなたの笑顔に接することで不思議な浄化を味わったものです
あなたは四人の子供九人の孫
十人のひ孫にその笑顔を分け与えてきました
あなたの嫁Kさんが最期の最後まで献身的に看取ることができたのはもしかして
例えようのないあなたのクリッとした笑顔が可愛らしかったのも一因かもしれません

大正生まれの過酷な宿命を全身全霊で受け止めた91年と4ヶ月でした
人として女として母として祖母として姑としても意地を貫いてみせたヒサさんが
いまどきは珍しいほどの最期まで嫁の底意地をみせたKさんに看取られ
とうとう逝ってしまいました
言葉は止めどなく溢れ濁流のごとく三男を襲撃してきますが
ヒサさんそろそろお別れのときがきました
「知らず、生まれ死ぬる人、いずかたより来たりて、いずかたへか去る」といった
常ならぬ人生の儚さと哀しみをおしえてくれた我が母ヒサさんに
あなたの愚息らしくあなたに負けない精一杯の笑顔で申し上げます
「母さん、ありがとう！」
どうか孝三さんTさんと三人で手を取りあって残されたあなたの家族を
何か言いたげなあのクリッとした笑顔で見守っていてください
では、さようなら

黄金のホールとモーツァルト・コンサート

会員番号 K.203 松田至弘

ウィーン国立歌劇場（オペラ座）前の広場で、
チケットを売っていた若者と少し立ち話をして
から、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ
の当日のコンサートチケットを買った。（49
ユーロ）

ウィーンでは、有名なオーケストラがいくつ
も活動しているが、このオーケストラの場合、
団員が18世紀の音楽家の衣裳とかつらを身につ
け、モーツァルトの曲を専門に演奏することで
有名である。

ウィーンのどのガイドブックにも写真入りで紹介されているが、演奏会はコンツェルトハウス、楽友協会ホール、国立歌劇場、ホーフブルク（王宮）大広間のどれかで行われる。

私が購入したチケットには MUSIKVEREIN-Goldener Saal と印刷されていた。これは、演奏会が楽友協会の黄金のホールを会場として行われるということである。

楽友協会は、ウィーンフィルハーモニーの本拠地である。ここの黄金のホールで毎年開催されるニューイヤーコンサートは、全世界にテレビ中継されるので、その光景を目にされた方もおられるであろう。

建物は、地下鉄のカールスプラッツ駅の近く、ベーゼンドルファー通りに位置して立っている。

開演が午後8時15分と遅いので、夕食を済ませてからぶらぶらと歩いて、20分ぐらい前に到着した。ロビーでプログラムと冊子『ウィーン楽友協会』（英文、ウィーン音楽愛好家協会発行）を買ってから、黄金のホールへ入った。

すでに、平土間席も一階と二階の栈敷席も聴衆でいっぱいになっていた。私は、チケットに指定されている席（平土間右側、前から26列目5番）を見つけて、そこに座った。



開演前の楽友協会黄金のホール

黄金のホールは金箔の装飾が施されたシューボックス（靴箱）型で、格天井、露台、建物の梁を支える女人像柱など、みごとな建築美を誇っていた。そして、どこか祝祭の雰囲気漂っているように感じられた。

やがて開演時間になると、エレガントな衣装とかつらを身につけた30人のオーケストラ・メンバーが現れ演奏が始まった。

最初は、オペラ「後宮からの誘拐」（K.384）序曲。快調な出だしである。心地よく、わくわくした気分になった。

次にオペラ「ドン・ジョヴァンニ」（K.527）からツェルリーナとドン・ジョヴァンニのデュエット。ドン・ジョヴァンニのARIA。後者は「シャンパンの歌」として知られている。

それから、「クラリネット協奏曲」（K.622）の第2楽章と第3楽章。クラリネットの澄んだ響きと音色の変化が素晴らしい。この楽団のエルンスト・オッテンザマーのクラリネットは特に有名だが、この時の奏者がその人かどうかはわからなかった。

続いて、オペラ「魔笛」（K.620）からパミーナのARIA「ああ感じる」が歌われ、「交響曲第40番」（K.550）へ。第1楽章のみの演奏だったが、哀愁をたたえた美しい名旋律に魅了された。

前半の最後は、「ピアノ・ソナタ第11番」（K.331）の終楽章に置かれたトルコ行進曲。当時のウィーンの人々の異国趣味に答え、作曲に挑戦するモーツァルトの姿が脳裏に浮かんだ。

ここでしばらく休憩があり、後半はオペラ「フィガロの結婚」（K.492）から始まった。胸をわくわくさせる有名な序曲に続いて伯爵のARIA。貴族の威厳を誇示する伯爵の歌声が、堂々と響いた。

その後「後宮からの誘拐」が再び取り上げられ、美しいARIAが歌われた。プログラムを見ると、コンスタンツェのARIAと記されていた。

そして、弦楽セレナード「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」（K.525）。「交響曲第40番」と同様、第1楽章のみの演奏であったが、活気があり弦楽合奏による交響曲というようにも聴こえた。つくづく不滅の名曲だと思った。

最後は、オペラ「魔笛」からパパゲーノのARIA「おいらは鳥刺し」、パパゲーノとパパゲーナのデュエット「パ、パ、パ、パパゲーナ」。大変楽しいARIAとデュエットで、満場を大い

に沸かせた。

盛大な拍手が鳴りやまず、二度のアンコールは、トルコ行進曲と「パ、パ、パ、パパゲーナ」のデュエットだった。

大好きなモーツァルトの曲のすばらしい生演奏を黄金のホールで聴き、あっという間に過ぎた2時間であった。観光客向けのコンサートではあったが、ぜいたくで優雅な気分を味わった。

一般的に、黄金のホールの音響は世界一と言われている。それでは、古典的な雰囲気を持ち、そのような豊かな音響を生み出すホールを造った人は、一体誰なのか。私は、そのことが気になったので、『ウィーン楽友協会』の冊子のページをめくり関連箇所を読んでみた。

テオフィール・ハンセン (1813~91)。……

初めて目にする名前であった。デンマーク出身のハンセンは、ウィーンにやってくる前ギリシアのアテネで8年間建築を学び、同時に建築家として働き、すっかり古代ギリシアに魅せられたようだ。その経験から、楽友協会の建物にギリシア様式を導入したのだ。

黄金のホールでは、音の波が板張りの床、格天井、露台、女人像柱などに当たって理想的に響き渡るといふ。また、床下と格天井の裏には空洞があり、それが共鳴して音響効果を高めるという。

すぐれた建築家ハンセンの傑作が、「黄金の



黄金のホールの女人像柱

音」とも呼ばれる音響現象を生み出しているのである。私は、モーツァルトの壮大な交響曲「ジュピター」(K.551)の全楽章をこのホールで聴けたら、どんなにすばらしいことだろうと思いつつ帰路についた。

情 報 の 偏 在

会員番号 K.10 畠山久雄

このタイトルで、多くの方が思い当たるのがパソコン問題かも知れない。

パソコンは必ずしも持ち主の思い通りには動いてはくれない。予期せぬ思考停止あるいは暴走に、何故?と考えるも、理由は分からないことがしばしばである。ところが、パソコンをある程度理解している人は、ものの数分で理由を理解して解決してくれる。

パソコン問題における『情報』とはパソコン(ソフト)に関する知識と経験であり、分かる人には多くの情報が偏在し「パソコン・オタク」と尊敬の意味で呼ばれることがある。分からない人には情報が少なく「パソコン・オンチ」と蔑まされる。失礼!しました。『偏在』を説明したつもりで、言い過ぎました。間違いなく情報は偏在しております。

しかし、分からない人に逆ギレされるケースもあるから恐ろしい。

むかしむかし、ある国に「事業仕分け」という制度がありました。仕分けを受ける説明役は多くの情報をお持ちの組織代表、それを取り囲む仕分け人が対峙する舞台です。

最初に、説明役が10分とか20分間、現状や経緯について口上を述べます。しかし、短時間で仕分け人に理解していただくのは至難の業、続いて仕分け人は『私達が理解できないのはあなたの説明が悪い。』と一刀両断に斬りつけ、説明役は深手を負いながらも満身創痕で戦う・・・何せ昔話で正確ではありません。

不正確でも良ければ仕分け人を理解させる手だてはあるはずです。

『あなたは何故モーツァルトが好きなのですか?』と聞かれて、「何歳で～があって、どこそこで～があって～」と正確に説明されたら、『・・・聞かなければ良かった。』となるかも知れません。

むしろ「ある時、ピピピッと私の心に入ってきた音楽がモーツァルトだったのです。」と言えば『なるほど、そうだったのですか、納得しました。』となることでしょう。

情報を多く持っている人が、情報が少ない人に真意を伝えることは難しいようです。むしろ多少不正確であっても上手に伝え、受け手はその意を汲み取る優しさが必要かも知れません。

ところで、文化関係のお仕事をするようになったお役人様がおりました。文化を理解しようとされていますが、展覧会や演奏会などに一度も足を運んだこともないのに、「皆さんの意見を聞きながら文化を判断させていただきます。」とおっしゃるのです。

お役人という立場上、多くの情報をお持ちの方と、そうでない方の双方から意見を伺い、正論もそうでない情報も全てを受け止めてご自分で判断しているようです。失礼ながら「パソコン・オンチ」が「オタク」と「オンチ」双方の話しを聞いてパソコンを判断しているように感じます。

さらに、お役人様は文化に関し『オベダッコブリ』するようになりました。何を言っても「それは知っている。」と、それ以上の情報を受け付けません。本物の文化に接する機会が多くあれば感動する機会もあり、決して『オベダッコブリ』はしないでことしよう。

情報の偏在が個人の責任に帰するものであればまだしも、権限を有し予算を運用する立場のお役人様に『オベダッコブリ』されると大問題です。情報は偏在しているのですから、情報をお持ちの方を敬い必要な場合は教えを請うこと、説明者も正確さより分かりやすさに心掛けることが大切と考えるこの頃です。

酒とモツの日々 (27)

会員番号 K.488 佐藤 滋

「今年を振り返って・・・」という年末の決まり文句が今年には胸にこたえます。東日本大震災をはじめ未曾有の大災害が重くのしかかった一年でした。早々に人生を達観し、「人生一寸先は闇」、「花の命は短くて～」、「生まれてすみません・・・」等と言った人がいますが、でも生きていて辛い時にふと感じるささやかな喜びの中にこそ、幸福の機微は潜んでいるのでしょ

う。「幸福は、ほどほどをもって極上とする」とうたった人もいました。

そんなことを日々感じながら、ふと被災地からの報道を見ていて、苦しいさなかに相手を気遣って微笑みを向ける人の笑顔ほど美しいものはないと思いました。重松清の小説に、「哀しみや寂しさが上手に育つと、それは優しさになるんだよ」という言葉があります。苦難を乗り

越える心の強さが、目の優しさに宿っているのですね。そして、この人たちは大きな不幸のなかで、ささやかでも確かな幸福の一粒を見つけている、と感じるのです。

大きな喪失のさなか、温かい心の絆に気づいた感謝と喜び・・・元に戻らない現実のなかで、生き抜くことを誓い、一步を踏み出した自信と誇り・・・同じ境遇のなかでこそ生まれる固い信頼と連帯・・・そこには本物の幸福に共通するものがあるのではないのでしょうか。会社の地位を利用して、ギャンブルで何億円も使って豪遊する人の幸福と、生き甲斐や愛を確信した人の幸福と、どちらが心を満たしてくれるのでしょうか。ミュージカル「アニー」のなかで、孤児アニーは、大富豪ウォーバックスにたずねます。「地位や権力やお金がそんなに大事なの？ みんな愛にこたえてくれないものばかりじゃない！」。

モーツァルトの人生の中で一番辛く、でも一番幸福だったのは少年から青年にかけてのヨーロッパ旅行だったのではないのでしょうか。各地に旅し、全身で音楽を受け止め、人びとと交わり、自身の音楽観・人間観を広めていったのですから。後年、創作に没頭しながら、彼の心の

なかには楽しかった各国のユニークな風俗、人々が思い出されていたと思います。それは旅芸人や書物、というお金を払って享受する喜びからは決して得られない、身を挺して旅の危険や病気に立ち向かい、母を失い、職を失いながら身につけた本物の音楽の喜びでした。耐えられない程の辛さを乗り越えた心の強さが、彼特有の優しく明るい音楽を生み出していったのでしょう。個性豊かなお酒が、いい材料、高価な設備だけでは決して生まれてこないことと同じです。

私たちの人生は平凡ですが、まだ未完です。今はささやかでも楽しい思い出を積み重ねてゆきましょう。お酒がそれを助けてくれれば、こんな楽しいことはありません。モーツァルトが近くで鳴っていたら、こんな素敵なお酒はありません。大切な人の笑顔がそばにあったら、こんな素晴らしいことはないでしょう。

今年は厳しい年でした。来年は？誰にもわかりません。でも今日一日を精一杯生きること、楽しいことを見つけること、楽しみを人と分かち合うこと、その積み重ねが幸せな明日を創ってゆくのです。「今日は明日の思い出」なのですから。

事務局より

今年は私にとっても皆さまにとっても決して忘れることのできない1年になったと思います。思えば全国で自然による災害が多く起こり、多くの方がその犠牲となりました。

そんな2011年でしたがつい先日、久元祐子さんが『学習するモーツァルト』というCDを出されました。ピアノ・ソナタの第

3集とのこと。今年はお会いすることが出来ませんでした。その活躍が各方面から聞かれモーツァルト広場ファミリーとしてとても嬉しく感じます。皆さまも11月7日にリリースされましたこの曲集、是非お聴き下さい。

来る年も皆さまにとって素敵な1年になりますよう祈念しつつ。 (K.575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております (H23年12月現在108名)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田 (事務局) 080(1673)8322